

水稻技術資料 No.5

令和6(2024)年 1月 下都賀農業振興事務所

種子消毒～育苗

◎種子消毒

良質米生産のため、採種ほ産の種子を**3～3.5kg/10a** 準備しましょう。
未消毒種子は必ず種子消毒を行いましょよう。

主な農薬

農薬名	使用量/10a	適用病害虫名
テクリードC フロアブル	200倍希釈、24時間 浸漬(浸種前)	もみ枯細菌病、苗立枯病、ばか苗病、ごま葉枯病、 いもち病

◎床土消毒

苗立枯病の発生を防ぐため、床土には必ず予防剤を使用しましょう。

※『人工培土』で消毒済と書かれていても熱処理されているだけです。

主な農薬名

農薬名	使用量	適用病害虫名
タチガレエース M 粉剤	6～8g/箱	苗立枯病(ピシウム菌・フザリウム菌)、ムレ苗防止、 根の生育促進
ダコニール粉剤	15～20g/箱	苗立枯病(リゾープス菌)
ナエファインフロ アブル	1000～2000 倍希釈	苗立枯病(ピシウム菌・フザリウム菌・リゾープス菌) 発根促進効果

◎浸種

浸種は日陰で、適切な水温(**15℃程度が理想**)で十分な期間を確保し2～3日
おきに水の交換をしましょう。※1番最初の浸水が冷水だと休眠する可能性があります。

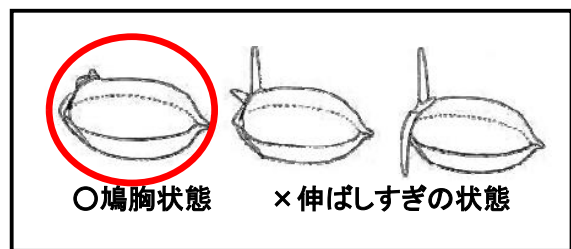
※高温での浸種や水の交換を忘れてしまうと、種籾が死滅してしまう恐れがあります。

積算温度の目安

消毒種子の種類	積算温度
温湯消毒種子	100℃
薬液消毒種子	120～130℃

例)水温 15℃×8日=120℃

催芽の目安



◎催芽

水温は、温湯消毒種子では**28℃**、薬液消毒種子では**30℃**としましょう。**18～20時間**で均一に催芽させましょう。

◎播種

播種量は、乾燥籾で150g以下(催芽籾で190g以下)/箱を基本として、均一に播種しましょう。厚播は、ムレ苗や徒長苗などの原因になります。

◎育苗【高温に注意！ムレ苗防止】

地球温暖化に伴い、高温による育苗への影響が問題になっています。高温による早期天候情報が発表された際は育苗管理に注意しましょう。

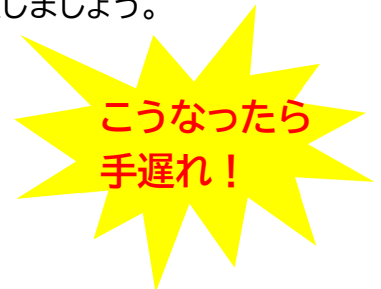
【高温育苗対策】

「平置き育苗」では、外気温が23℃を超えると床土温度が40℃以上になる場合があります。できるだけ喚起に努めハウス内温度を低く管理しましょう。(遮光資材を変えるのも効果的です。例:「ホワイトラブ」)

苗の生育ステージとハウス温度管理

期間	日中	夜間
育苗初期 (緑化期～硬化期)	18～25℃ ※30℃以上は厳禁	5～10℃ ※5℃以下にはしない
育苗中期～後期		5～7℃ ※5℃以下にはしない

注意)特に緑化期の高温管理はムレ苗の発生につながるので注意しましょう。



栽培管理

◎施肥

適正量を入れて倒伏を防ぐ事が大切です。更に堆肥を施用すると土壤の膨潤化が期待されます。稲体の活力向上のためにケイ酸の施肥もおすすめです。

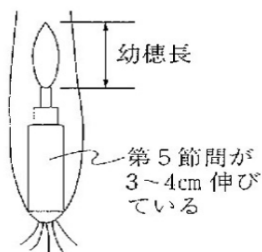
下都賀管内の品種別窒素の施肥基準(kg/10a) ※地力にあわせ施肥量を加減して下さい

作期	品種	全量基肥	分施(基肥+追肥)		
		窒素量	基肥窒素量	追肥窒素量	総窒素量
早植 ～5/20頃	コシヒカリ	4～5	2	2～3	4～5
	あさひの夢	7～8	5～6	3～4	8～10
	とちぎの星	5～6	4～5	2～3	6～8
普通植 ～6/20頃	あさひの夢	6～7	5～6	2～3	7～9
	とちぎの星	4～5	3	2～3	5～6

◎追肥

分施の場合は、生育量に応じて追肥を行いましょ。早めの追肥は穂が多くなりやすいのですが、下位節間が徒長し倒伏しやすくなります。

カッターナイフで縦割りにした図



幼穂長	出穂前日数(約)
2mm	22日
5mm	20日
8mm	18日
20mm	15日
80mm	10日

平均的な生育の株を探し、草丈の最も高い茎1本を根元から取る。
葉色が淡く、生育量が小さい場合は18日前、倒伏が懸念される場合は10日前に追肥を行いましょ。

◎田植

出典:「安心イネづくり」p66(農文協)

5月中旬からの移植をおすすめします。移植が早すぎると、出穂期が早まり高温の時期に当たりやすく品質低下につながります。慌てずに作業を行いましょ。

植付株数は60株/坪、植付本数は3~5本/株植を標準としましょ。6~8本/株の植付は、過繁茂や倒伏につながります。また、1~2本/株の植付では、穂数不足や欠株を生じやすくなります。

【疎植栽培には要注意！】

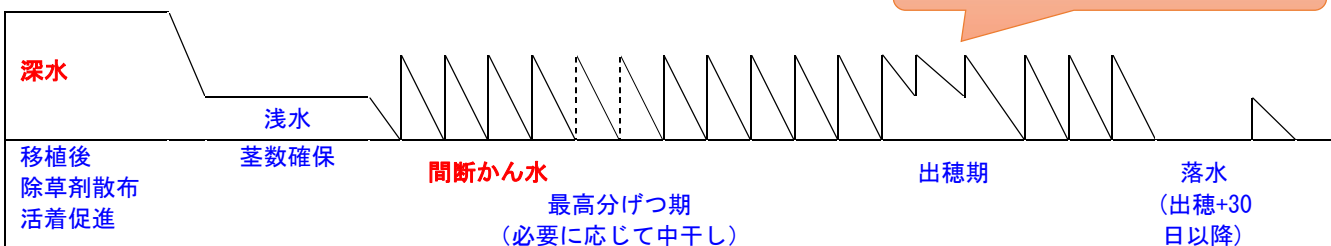
疎植で1株植付本数を多くして、1株当たりの穂数を多く確保する傾向が見られます。しかし、疎植栽培は気象条件により穂数・粒数の年次間のバラツキが大きいため、穂数は株数で確保した方が収量・品質が安定します。

◎水管理

昨年は高温による品質低下が顕著に見られました。適切な水管理を行うことで品質低下のリスクを減らすことができます。

- ① 田植から5~7日間は水深5cm程度の深水に保ち、活着を促進させましょ。
- ② 必要茎数が確保され次第、間断かん水に移行しましょ(かん水→自然落水→かん水)。**品質を低下させない為には、間断かん水が基本です。**
- ③ 田面が乾いてひびが入る程の極端な中干しは避けましょ。コンバインによる収穫しやすさの観点等から強めの中干しをする傾向が見られます。
- ④ 収穫前の落水は**出穂後30日以降**に行いましょ。

出穂・開花期は最も水が必要！



※水管理イメージ図

◎除草剤

高温による薬害に注意が必要です。防除は涼しい時間帯に行いましょう。

※極浅植やイネの根が露出していたり、砂壤土や減水深(ほ場の水の減り具合)が大きい条件では、除草剤成分がイネの体内に吸収されやすくなるため、薬害が大きくなることがあります。

除草剤散布時の水管理

- ① 散布直前には、湛水深を5cm位のやや深水とする。
- ② 散布後1週間は、絶対に落水・掛け流しをせずに除草剤の処理層を安定させる。
- ③ 散布後は、差し水等で水深3～4cmを保ち、地表面は露出させない。

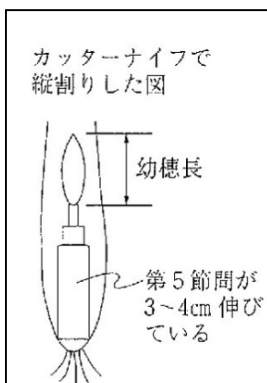
病害虫防除

◎稲こうじ病

発生後の防除ができないため、必ず適期防除(出穂期20日前～10日前)を行います。

幼穂長の測定と防除適期

出典：「安心イネづくり」
p66(農文協)



幼穂長	出穂前日数(約)
2mm	22日
5mm	20日
8mm	18日
20mm	15日
80mm	10日

平均的な生育の株を探し、草丈の最も高い茎1本を根元から取る。

稲こうじ病の
防除適期



◎いもち病

ほ場の「取り置き苗」は、いもち病の発生源になるので早めに処分しましょう。気象予報や農業環境指導センターHPに掲載されるBLASTAM情報を参考に、ほ場をよく見回り早期発見・早期防除を行います。

◎縞葉枯病対策

罹病性品種(コシヒカリ)、抵抗性品種(あさひの夢・とちぎの星)に関わらず、縞葉枯病のウイルスを媒介するヒメトビウンカの薬剤防除を行います。なお、箱施用剤を使用したほ場で本田防除を行う場合は同一系統・薬剤の連用を避けましょう。

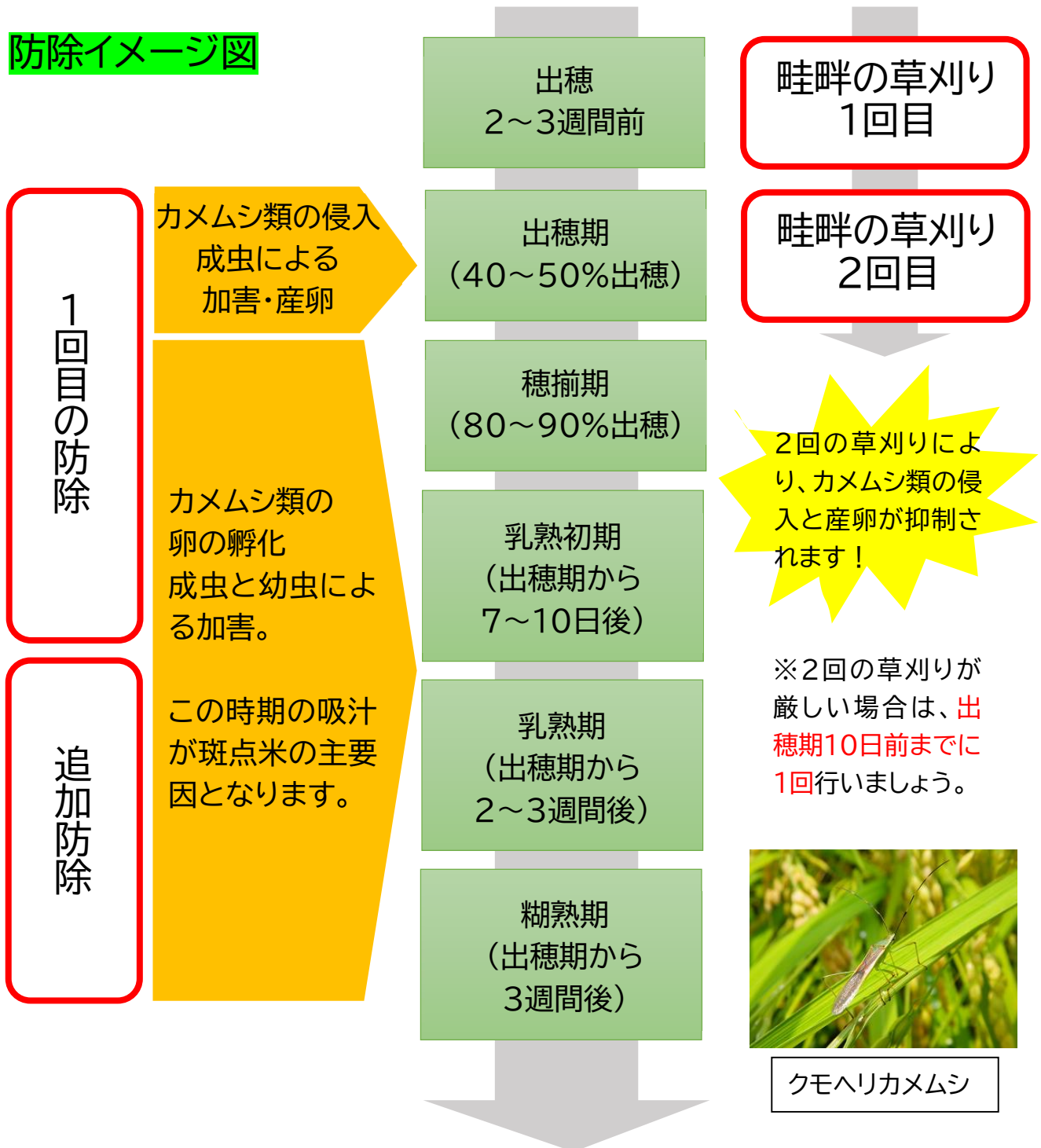
◎斑点米カメムシ類

水田内・畦畔の除草および穂ぞろい期に斑点米カメムシ類が水田内に確認できる場合は、**乳熟初期(出穂期7～10日後)**までに適用のある薬剤で防除を行いましょう。その後も発生が多い場合は、**7～10日間隔で1～2回の追加防除**を行いましょう。

粒剤 出穂期～出穂期の7日後**まで**に散布

液剤・粉剤 乳熟初期(出穂期7～10日後)**に**散布

防除イメージ図



収穫

◎収穫適期

出穂後10日間の最高気温が高いと胴割れしやすくなります。収穫前の落水は出穂後30日以降に行いましょう。収穫期の判断は、刈り遅れによる品質低下を防ぐために、出穂期後の積算気温(1000℃～1100℃が目安)と帯緑色籾率(刈取適期目安:10～3%)で総合的に判断しましょう。

●刈取り適期の判断(帯緑色籾率の見方)



(出典:「安心イネづくり」p82(農文協))

「帯緑色籾率」とは、1穂の中に僅かでも青みが残っている籾の数の割合(%)のことです。帯緑色籾率が10%になったら刈始め、3%になるまでに終わらせます。葉や枝梗は緑色でも、籾はすでに黄変して刈取り適期を過ぎている場合がありますので注意が必要です。
※不稔籾は含まずに見てください。

【台風対策】

- ① 台風前に刈取適期のほ場は収穫し、冠水したほ場は速やかに排水しましょう。
- ② 倒伏した稲は、晴れ間を見て株起こししましょう。
- ③ 台風通過後のフェーン(高温・低湿)時は入水し、根を健全に保ちましょう。

◎丁寧な乾燥・調製

胴割れしやすい条件になった時は、乾燥温度を通常より低く設定し、ゆっくり乾燥して(毎時乾減率0.8%以下)、品質低下を防ぐことが必要です。調製の際はロール幅の調整を行い丁寧に行いましょう。



とちぎグリーン農業推進方針について
栃木県HPからご覧ください

<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g04/green-nougyou.html>



問い合わせ先

栃木県下都賀農業振興事務所 経営普及部 農畜産課 0282-24-1101

HP <http://www.pref.tochigi.lg.jp/g54/index.html>